



①土橋町の幌獅子 ②柿岡館の獅子 ③つくば市小田の大獅子
④つくば市北条の三角神輿 ⑤露祓を務める土橋町と仲之内の幌獅子
⑥總社宮に参拝する宮下町の幌獅子 ⑦石岡獅子舞連合会の合同練習会

ふるさと歴史館
第46回企画展

幌獅子

成立過程を探る



令和8年

10月7日

▶12月27日

月曜休館（祝祭日のときはその翌日）

午前10時～午後4時30分

入館無料

展示解説

10月10日（土）午前10時30分～



石岡市立ふるさと歴史館

茨城県石岡市総社 1-2-10 石岡小学校敷地内

電話 0299-23-2398

幌獅子 成立過程を探る

■目次

はじめに	1
I 幌獅子とは	
幌獅子の概要	2
幌獅子の分布と屋台獅子	3
II 幌獅子の成立過程	
江戸時代の祭礼から探る	9
伝承から探る	10
形態から探る	11
芸態から探る	15
おわりに	17

■例言

本冊子は、令和8(2026)年10月7日から12月27日に開催する石岡市立ふるさと歴史館第46回企画展に際して作成したものです。

展示および本冊子の執筆は、「II 幌獅子の成立過程 芸態から探る」を藤井孝一(小美玉市文化財保護審議会委員)、そのほか及び全体の構成・編集を谷仲俊雄(石岡市教育委員会 文化振興課)が行いました。

展示にあたっては多くの先行研究を参考としましたが、特に下記を参考にしました。

常陸國總社宮例大祭文化財指定検討協議会編 2020『常陸國總社宮例大祭
(石岡のおまつり)の歴史と現況－石岡のおまつり歴史実態調査報告書－』
石岡市

石岡市教育委員会文化振興課編 2026『常陸國總社宮祭礼の獅子・山車・
ささら行事調査報告書』石岡市教育委員会

藤井孝一 2026「幌獅子の発展と獅子頭彫刻」『ひたち小川の文化』第44号

展示に使用した写真は、藤井・谷仲のほか、伊藤純、萩谷良太、竹内智晴、株式会社フジヤマ、石岡市秘書広聴課が撮影しました。各写真に撮影日と撮影者を記しました。

幌獅子

成立過程を探る

「常陸國總社宮例大祭（石岡のおまつり）」を彩る出し物に「幌獅子^{ほろ}」があります。幌を被せた車輪付きの小屋に囃子方をのせ、小屋の前に立つ若者が大きな獅子頭を揉みながら歩く、石岡独特の出し物です。「石岡のおまつり」の代名詞であり、シンボルとも言えます。

約 25kg もの重さになる獅子頭を、若者たちが代わる代わる揉み、幌の端をもった人々がそれに合わせて上下にあおることで、ダイナミックな獅子舞が演じられます。小屋には大太鼓と締め太鼓が据えられ、子どもたちが乗り込みます。

土橋町と仲之内の幌獅子は神輿^{み こし}渡御^{つゆはらい}の露祓を務め、行列を先導しながら道中の魑魅魍魎^{ち み もうりょう}を祓い清めます。そのほかの町内は神輿に付き随い、幌獅子の総数は最大で 33 台にもなります。躍動感のある獅子が延々と続く行列は、「石岡のおまつり」の大きな見所です。

では、その石岡独特の出し物は、いつ、どのようにして生まれたのでしょうか。今回は幌獅子の「形態」と「芸態」に着目し、成立過程を探ります。

幌獅子の概要

幌獅子とは、幅広に仕立てられた一枚の幌（胴幕）に覆われた車輪付きの小屋と、大きな獅子頭とが一体になった出し物です。「獅子」あるいは「お獅子」と呼ばれることが多く、「石岡のおまつり」には現在、最大 32 町内から 33 台の幌獅子が参加しています。

幌獅子は、神輿の前と後に付き随いますが、特に神輿前を進むのは「土橋町」と「仲之内」。露祓町内として伝統を有する 2 町内が「富田町」のささらとともに、神輿を先導します。神輿の後には、年番町をはじめとする他町内の幌獅子が続きます。長大な幌獅子の行列は他の祭礼には見られないもので、「石岡のおまつり」のもっとも特徴的な出し物です。祭礼中日の奉祝祭では、石岡駅前からの直線道路（御幸通り）を幌獅子が連なってパレードを行い、これも「石岡のおまつり」の見所のひとつとなっています。

幌獅子の前では、力のある若者が幌の中で大きな獅子頭を振る動きにあわせて、獅子頭の左右に控える子どもたちが幌を煽るように上下させることで、躍動感のある獅子舞が演じられます。

小屋は、二輪の荷馬車に柱や梁・棟などを組み上げて屋根を架けた形態で、文字通り、小屋がけされたものを基本とします。二つの車輪を軸足にすることで、小屋は前方と後方が上下したり、進路にあわせて左右に振られたりします。このことにより、ダイナミックな獅子の動きが表現され、躍動感のある出し物となっています。

小屋にかけられている大きな幌は、紺色を基調として、水色・緑・えんじなどを配した二色の縞で構成されています。その色の組み合わせは様々ですが、単色のものや、町名にちなんだ紋・文様を配したものもあり、町内ごとに異なっています。そのため、幌をみればそれがどこの町内の獅子なのかを見分けることができます。町内ごとにされる個性豊かな獅子頭と幌が並び、一斉に行列をする様子は圧巻です。

幌獅子の囃子は、小屋の内部に据えられた大太鼓と小太鼓、そして獅子の側で演奏される笛・鉦により構成されます。幌を煽いだり、幌獅子の周囲で囃し立てたりするのは、たくさん子どもたち。石岡の子どもも多くは、獅子に参加をすることで、初めて祭りに関わりをもつようになります。石岡のもうひとつの祭礼風流である山車がゆっくりと動く大人を中心とした出し物であるのに対して、幌獅子は動きのある子どもたちによる出し物という側面も有しています。



▲神輿渡御の露祓を務める土橋町の幌獅子

2023 年 9 月 16 日、萩谷撮影



▲年番町を先頭に神輿に付き随う幌獅子

2024 年 9 月 16 日、市秘書広聴課撮影



▲小屋の 3D 画像〔土橋町〕 フジヤマ作成



▲獅子後方で囃し立てる子どもたち

〔若松町〕 2023 年 9 月 17 日、フジヤマ撮影

幌獅子の分布と屋台獅子

茨城県内の各市町村に協力いただいて幌獅子が奉納・披露される祭礼等の所在調査を行い、地図にしてみました（地図中●）。地図を見ると、幌獅子は石岡に近いエリアに集中しているのがわかります。分布の中心にあるのは、「石岡のおまつり」の幌獅子です。

石岡で使用されていた幌獅子（小屋）が他地域に譲られたように直接移された例もありますが、多くは石岡の幌獅子を範として幌獅子（小屋）が製作され、それが一定の分布域を形成していると考えられます。

ところで、土浦周辺にも囃子方が乗り込む車輪付きの小屋（屋台）に大きな獅子頭が付く「幌獅子」に似た出し物があります（地図中□）。しかし、これは幌獅子とは大きな違いがあります。もっとも

大きな違いは、小屋にあたる部分が幌で覆われていない点です。石岡の幌獅子では、幌を小屋の下まで完全に覆うことで、内部の囃子方を見せないのが原則で、土橋町では遵守されています。また土橋町では、獅子の舞手の交代も幌内部で行う、笛の奏者も小屋内部で演奏するなど、人の動きを視界から排除することで、大獅子そのものの動きを見せることに徹しています。



▲幌獅子〔土橋町〕（左）と屋台獅子〔土浦市文京町〕（右）

左：2023年9月18日、萩谷撮影 右：2024年7月27日、萩谷撮影



▲幌獅子〔土橋町〕（左）と屋台獅子〔土浦市真鍋六丁目〕（右）

左：2023年9月17日、萩谷撮影 右：2023年8月26日、萩谷撮影

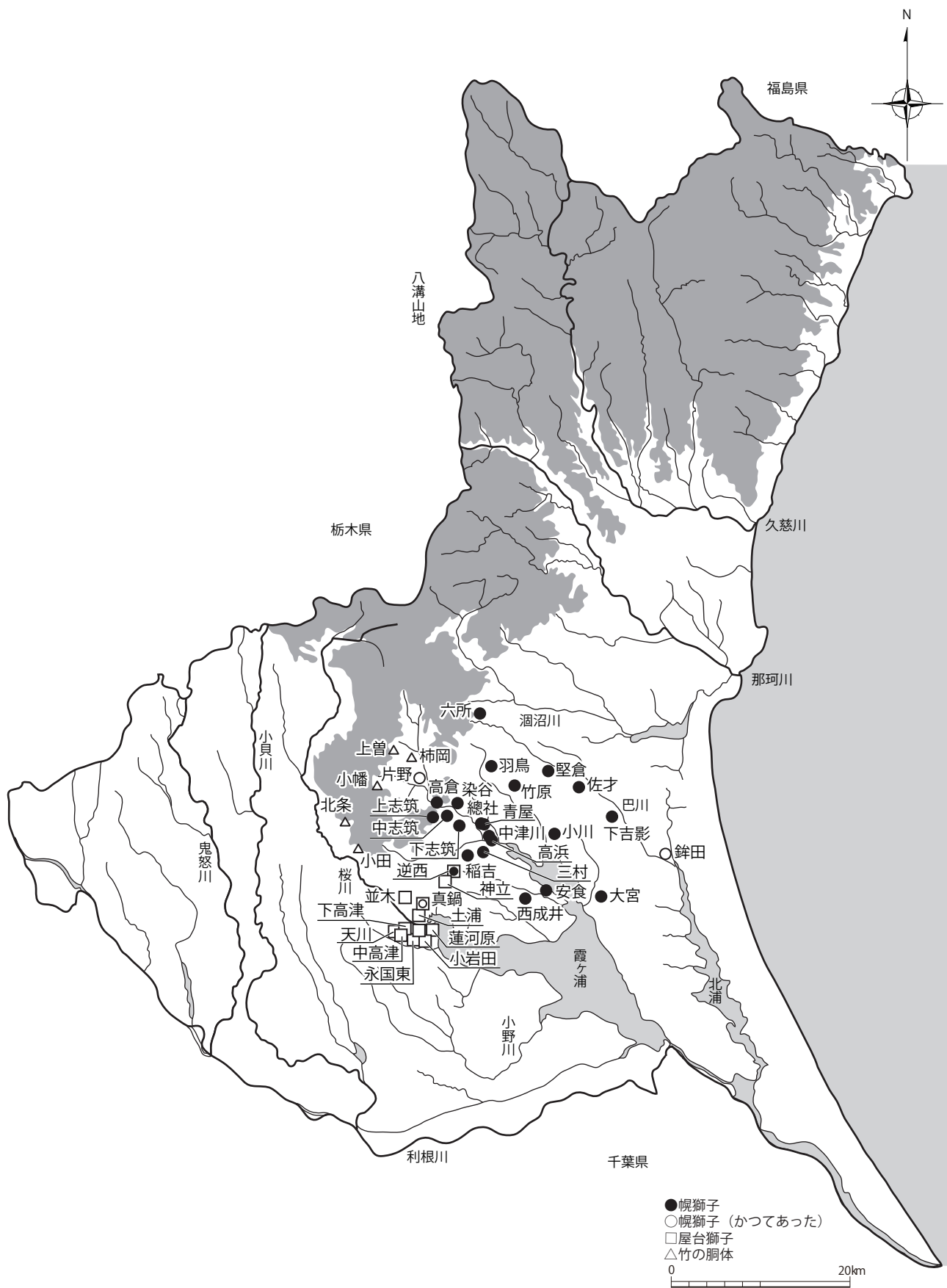


一方土浦周辺では、

小屋部分が幌で覆われていないため、囃子方の演奏している姿がよく見えます。囃子方が側面を向いて座っている町内も多く、囃子方を見せる対象としています。石岡では「見せない」対象である囃子方を「見せる」対象としているのです。さらには小屋に屋根を付けることで、独立した囃子屋台のようになっています。つまり土浦周辺の例は、「幌獅子」ではなく、屋台の前方に大きな幌をつけた獅子を取り付けた「屋台獅子」と言えます。

また、屋台獅子は四輪で、二輪の幌獅子のように前後が上下したり左右に素早く振れたりすることはありません。屋台獅子は、石岡の幌獅子とは似て非なるもののなのです。

屋台獅子の分布は、土浦周辺、石岡の南側に分布しています。ただ、以前は土浦でも幌獅子がでていたことがあり、また神立でも二輪の幌獅子だったのが、四輪で安定感のある屋台獅子に切り替えられたという例があるようです。もとは石岡のような幌獅子が存在していたが、後に屋台獅子が普及していったとも考えられます。



▲幌獅子と屋台獅子の分布図 石岡市教育委員会常 2026『常陸國總社宮祭礼の獅子・山車・ささら調査報告書』図 10-4-1 を一部改変

笠間市 六所神社例大祭

実施月：11月



2025年11月1日、谷仲撮影

小美玉市 鹿島神社祭礼 羽鳥まつり

実施月：10月



2003年7月27日、藤井撮影

小美玉市 堅倉金刀比羅神社例祭

実施月：8月



2025年8月10日、藤井撮影

小美玉市 竹原神社例大祭 (アワアワ祇園)

実施月：7月



2025年7月19日、谷仲撮影

小美玉市 佐才稲荷神社境内社 八坂神社祭礼

実施月：7月



2022年7月23日、藤井撮影

小美玉市 下吉影不動尊祭礼

実施月：7月



2003年7月26日、藤井撮影

行方市 玉造大宮神社例大祭

実施月：5月



2025年5月4日、谷仲撮影

石岡市 片野八幡神社祇園祭

実施月：7月



2003年7月19日、藤井撮影

かすみがうら市 高倉神社祭礼

実施月：7月

かすみがうら市 上志筑祇園祭り

実施月：7月

かすみがうら市 中志筑須賀神社祭礼

実施月：7月



2025年7月21日、谷仲撮影

かすみがうら市 下志筑祇園祭り

実施月：7月

石岡市 染谷八坂神社祇園祭

実施月：7月



2024年7月13日、谷仲撮影

石岡市 常陸國總社宮例大祭

実施月：9月

石岡市 青屋祭

実施月：7月



2026年7月19日、竹内撮影

石岡市 三村須賀神社祭礼

実施月：7月



2024年7月21日、谷仲撮影

石岡市 中津川祇園祭

実施月：7月



2024年7月26日、竹内撮影

かすみがうら市 稲吉のおまつり

実施月：10月



2003年7月19日、藤井撮影

石岡市 高浜神社青屋祭

実施月：7月



2003年7月26日、藤井撮影

かすみがうら市 逆西祇園

実施月：7月



2024年7月20日、萩谷撮影

かすみがうら市 西成井祇園

実施月：7月



2016年7月23日、萩谷撮影

かすみがうら市 安食太宮神社祭礼

実施月：7月

江戸時代の祭礼から探る

石岡独特と考えられる「幌獅子」は、いつ、どのように生まれたのでしょうか？

まずは古文書を紐解き、江戸時代の祭礼から探ってみましょう。

国府の祭祀に源流を有する常陸國總社宮で江戸時代に行われていたのは、現在の奉祝祭の行事である「奉納相撲」でした。年番町により奉仕される奉納相撲こそが「石岡のおまつり」の原形と言えます。

一方で、江戸時代の府中（現在の中心市街地）では中町の天王社の祭礼（祇園祭）、木之地の愛宕社の祭礼（愛宕祭）で様々な「作り物」（祭礼風流）が出され、賑わっていたことが記録されています。現在の「石岡のおまつり」に参加する出し物のうち、「ささら」と「獅子」はこれらを引き継いだものになります。

明和年間（1764～1772）と推定される古文書（矢口家文書）には、祇園祭の次第が次のように書かれています。

一（六月）十四日 きほん御祭礼之次第

一番	さゝら	富田	二番	やたいおとり	中町
三番	子共おとり	香丸	四番	子共おとり	守木
五番	ミろく	木之地	六番	ふし	泉町
七番	田打おとり	幸町	八番	ほうさい	青木
九番	かさほこ	若松町	十番	ほろ	中（之）内
十一番	人さゝら	金丸			

富田町のささらが行列の先頭を進むのは現在と同じですが、各町それぞれの出し物だったことがわかります。仲之内の出し物は「ほろ」で、これを「幌獅子」と考える説もありますが、「母衣」(母衣武者)と考えるのが有力です。母衣は、現在も柿岡の八坂神社祇園祭に伝わっています。

では、幌獅子に繋がる出し物はいつ頃から確認できるのでしょうか。さらに古文書を探してみると、以下のような嘉永7年（1854）の愛宕祭の記録が見つかります（森家文書）。

愛宕祭礼、年番守木町踊り屋台、土はしは当年より定例大獅子（略）

つまり、この年の愛宕祭から土橋町は「大獅子」を出し、以後「定例」、すなわち毎年出すようになったということが読み取れます。

これを裏付けるように、安政3年（1856）の愛宕祭の記録には、

七月二日愛宕御祭礼年番泉町風流物書上左之通

さゝ羅 富田町

豊さい 青木町

獅々 土橋町

踊屋台 金丸町

関の戸忠臣蔵三段目附屋台浦しま 国分町泉町

右之通二御座候、年番香丸組

とあり、「土橋の大獅子」が定例化したことがわかります。

現在の「石岡のおまつり」において露祓町内として重要な役割を果たしている土橋町の獅子は、ここに始まったのです。

伝承から探る

江戸時代における「大獅子」とはどのような形態だったのでしょうか。現在のような大きな幌で小屋を覆う「幌獅子」の形態だったのでしょうか。石岡における各町の伝承から探ってみましょう。

露祓町内として、幌獅子の古い歴史を有する2町内、土橋町と仲之内にはそれぞれ次のような伝承があります。

- ・土橋町 昔は竹材で馬車の車はつけず、担ぎ出す方式だった
- ・仲之内 明治期には竹で小屋（やぐら）を組み上げ、幌をかぶせたものを肩で担いだ

また、土橋町の獅子小屋には「変なところに横棒があるが、これは担いでいた時の名残」という話も聞きます。土橋町と他の町内の小屋を比較すると、土橋町には現在の巡行時には使用されていない横棒（写真黄色矢印、図黄色部分）があります。確かにもとは担ぐための横棒であったように見えます。

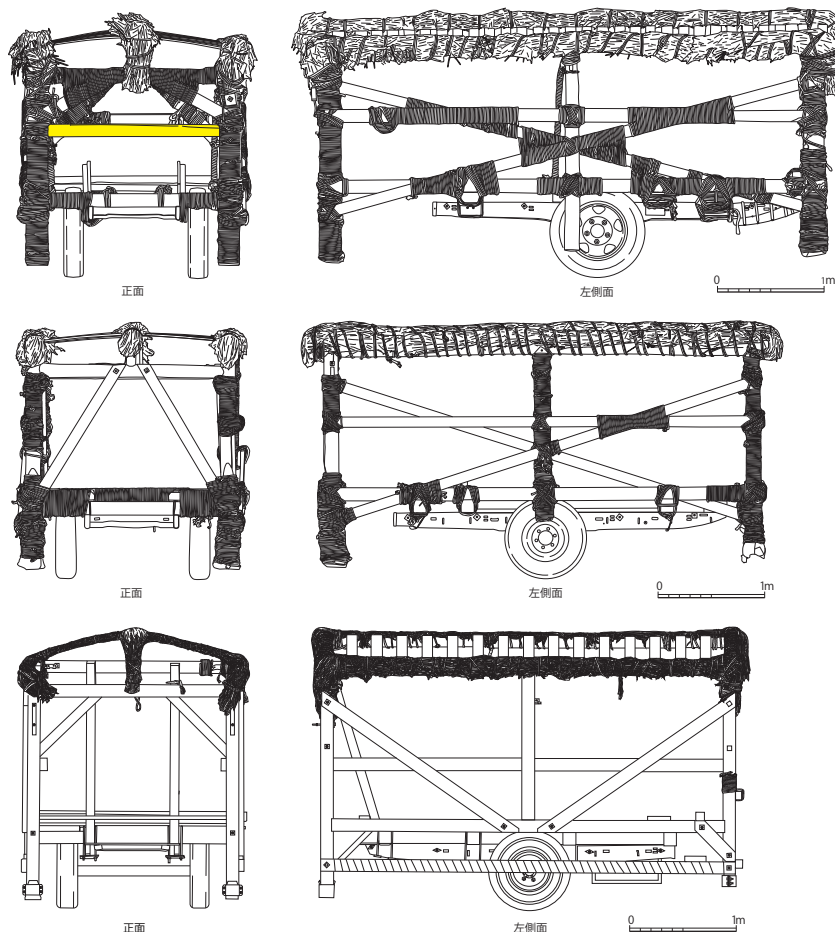
そのほか「小屋を下ろす」という表現も残っています。巡行時には小屋の前方（頭）を上げるが、門付けのときは下げる。これを「小屋を下ろす」と表現するといいます。

これらの伝承からは、以前は現在のような車輪はつかず、竹材で組んだ「小屋（やぐら）」状の形で、「担ぐ」方式であったと考えられます。



▲土橋町幌獅子の幌内部の様子

黄色矢印が「横棒」 2023年9月18日、フジヤマ撮影



▲土橋町（上段）と仲之内（中段）、旧國分町（下段）の獅子小屋 フジヤマ作図

形態から探る① 館の獅子

伝承から推定された「竹材で組んだ「小屋（やぐら）」状で「担ぐ」方式」の獅子とはどのようなものだったのでしょうか。これに関連して興味深い指摘があります。茨城県の文化財保護審議会の委員でもあった民俗学者 中村茂子氏の「幌獅子の基本になったであろう土橋の獅子も、かつては館獅子のような素朴な伝承であった」という指摘です。つまり、幌獅子の原型を館の獅子（石岡市柿岡）に求めたのです。では、館の獅子とはどのようなものなのでしょうか。

館の獅子は、石岡市柿岡の八坂神社祇園祭（柿岡のおまつり）において、荒宿のささらとともに祭りの先陣を切ります。獅子頭に長さ5m余りの竹で組まれた胴体が付きます。胴体の竹には、横棒を除き荒縄が全面に巻かれ、竹表面は見えません。胴体のほぼ中心部に大太鼓を下げ、幌をかけます。左右 10 人前後が担ぎ持ち、一人が胴体の中に入って太鼓を打ちます。笛役とともに巡行しますが、時折、胴体のみで荒々しく暴れ回ります。

現在の胴体は平成 17 年 1 月に製作されたものですが、以前はもっと大きかったと言います。

館の獅子は、「竹材」で組んだ「担ぐ」方式の獅子ではありますが、「小屋（やぐら）」とは言いにくい形態です。館の獅子が幌獅子の原型である可能性は考えられますが、伝承から推定された形態との間には隔たりがあると言えます。



▲館の獅子

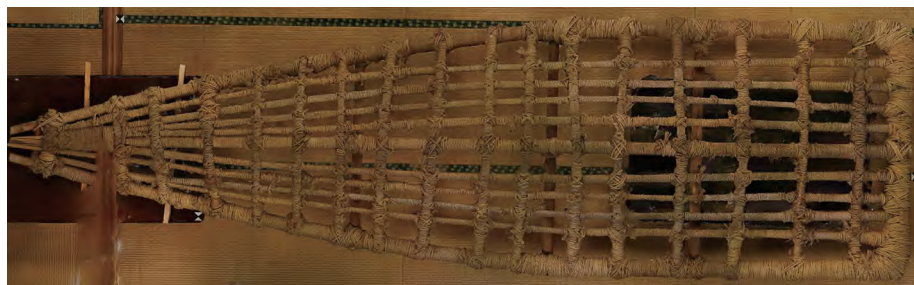
上：本祇園には母衣が続く 2026 年 7 月 25 日、谷仲撮影
下：胴体のみで暴れ回る 2023 年 7 月 21 日、谷仲撮影



▲胴体（上）と
内部に吊り下げられた太鼓（下）
2026 年 7 月 25 日、谷仲撮影



左側面



上面



右側面

▲胴体のオルソ画像 フジヤマ作図

形態から探る②

館の獅子の他にも、八郷地区やつくば市には「竹や木で胴体を作った」獅子が存在しています。

上曽祇園祭の獅子は、現在は行われていませんが、かつては「巨大な竹を組み、長さ 10 数 m の紡錘形をしたその中央に太鼓を組み込み、尾は葉を残した竹、中央部を縞模様の布で覆い、この獅子の首に長い引き綱を結び、笛太鼓の祭ばやしで宿中を担ぎまわ」ったとされています。そして、「夕刻、乱調子の太鼓に合わせて男たちは鬼神の如く暴れ、巨大な竹組みを投げ踏みつけ、くたくたに原型をとどめなくなるまで破壊」したそうです（軽部豊 1994「上曽宿と魚の道」『ゆう』3）。

小幡の白鳥神社祇園祭の獅子（里地区）も、現在は胴体がありませんが、かつては竹製の胴体だったと言います。

つくば市小田地区祇園祭の大獅子は胴体は竹を荒縄で組んだもので、その上に大きな布が掛けられています。獅子頭の下に先が二股になった竹竿を持った若者が数名付き、竹竿で獅子頭周囲の木組みを押さえ、獅子頭を上下させます。獅子の所作にあわせ、胴体に空気を送ることで、大きく布が膨らみ、生きて

いるような動きとなります。獅子頭下、胴部との接続部には、筒状のものが下げられています。巡行時の囃子には、別途手車にのせた太鼓（大太鼓、ツケ太鼓）が用いられています。

つくば市北条地区祇園祭では「三角神輿」と呼ばれる獅子頭を有する神輿が巡行します。胴体は、木製の三角形のもので、布で覆われています。この布は前方に伸び、獅子頭から伸びる布と紐で結びつけられています。巡行時は、布の中で獅子頭を振る動きに合わせて、獅子頭の左右に控える子どもたちが布を上下させます。胴体にはトンボがつき、文字通り神輿のように担ぎます。胴体内部には太鼓が吊り下げられています。昭和 30 年代に途絶えてしまい、平成 4 年に復活したとのことで、以前のものは竹材を縄で組み上げていたとのことです。



獅子の胴体は竹で作りそれをもみ歩く上曽の祇園祭

▲上曽の獅子 『広報やさと』平成 7 年 8 月号



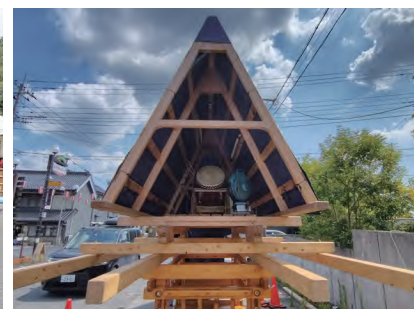
▲小田の大獅子

2025 年 7 月 19 日、谷仲撮影



▲小田の大獅子

左：頭と胴体の接続部、右：胴体の内部 2025 年 7 月 19 日、谷仲撮影



▲北条の三角神輿

上：2025 年 7 月 26 日、谷仲撮影 下：2025 年 7 月 26 日、萩谷撮影



形態から探る③ 型式学的検討

石岡周辺に存在する「竹や木で胴体を作った」獅子を見ると、上曾や北条の例は館より構造物のようになっていますので、「小屋（やぐら）」状という形態に近くなっています。では、その他の特徴はどのようなのでしょうか。ここでは考古学で用いられる型式学という方法により、変遷、新旧関係を検討してみたいと思います。

型式学では、モノの色々な特徴（属性）に注目し、それぞれの特徴の変化の順番を考えます。形等が変わる背景には機能的な進化や流行の変化等があると考えられるからです。

現在も行われている館の獅子、小田の大獅子、北条の三角神輿、そして幌獅子の特徴を整理したのが下の表です。では型式学的に考えてみましょう。

	①胴体の形状	②胴体の素材、組み方	③巡行方法	④囃子方
柿岡 館の獅子	前後あり	竹に荒縄を巻いて組む。荒縄は全面に巻く	担ぐ	大太鼓（胴体内） 笛（外）
小田の大獅子	前後あり	竹に荒縄を巻いて組む。荒縄は交差部・複数材を束ねる部分中心に巻く	棒（竹竿）で掲げる 頭・胴体前方を高くする	大太鼓（手車） ツケ太鼓（手車） 笛（外）
北条の三角神輿	前後なし	木（以前は竹に荒縄を巻いて組む）	担ぐ	大太鼓（胴体内） 笛
幌獅子	前後なし	木。天井部は板材または竹材。荒縄・藁を巻く	二輪で押す 胴体前方を高くする	大太鼓（胴体内） ツケ太鼓（胴体内） 笛（胴体内・外） 鉦（胴体内・外）

①胴体の形状は、「前後あり」（館、小田）から「前後なし」（北条、幌獅子）へという変遷が想定できます。

②胴体の素材は、竹材を全面に巻くもの（館）から部分的に巻くもの（小田）と言う変遷が想定できます。北条は現状では縄は巻かれていませんが、以前は竹材を荒縄で結び、組み上げていたと言います。ただ残念ながら、館のように全面に巻いていたのか、部分的に巻いていたのかはわかりません。

幌獅子には機能的・装飾的とは言えない場所に荒縄が巻かれていたり、藁を束ねていたりします。これは荒縄で結束していた名残（痕跡）と考えられるのではないのでしょうか。

③巡行方法は、「担ぐ」から「棒で掲げる」への変遷、あるいはその逆も考えられます。①で想定した変遷を加味すると、「担ぐ」（館、北条）から「棒で掲げる」（小田）という変遷が考えられます。

④囃子方は、「胴体内」（館、北条）から「手車」（小田）という変遷が考えられます。小田の大獅子では、頭と胴部の接続部に筒状のものが下げられています。太鼓の名残（痕跡）でしょうか。

以上の検討をまとめたのが、次の図です。型式学的には、館の獅子のような形態を祖型に、棒で掲げるものとして小田の大獅子が生み出され、担ぐもので胴体を立体的、構造物のようにしたものとして北条の三角神輿が生み出されと考えられます。そして、



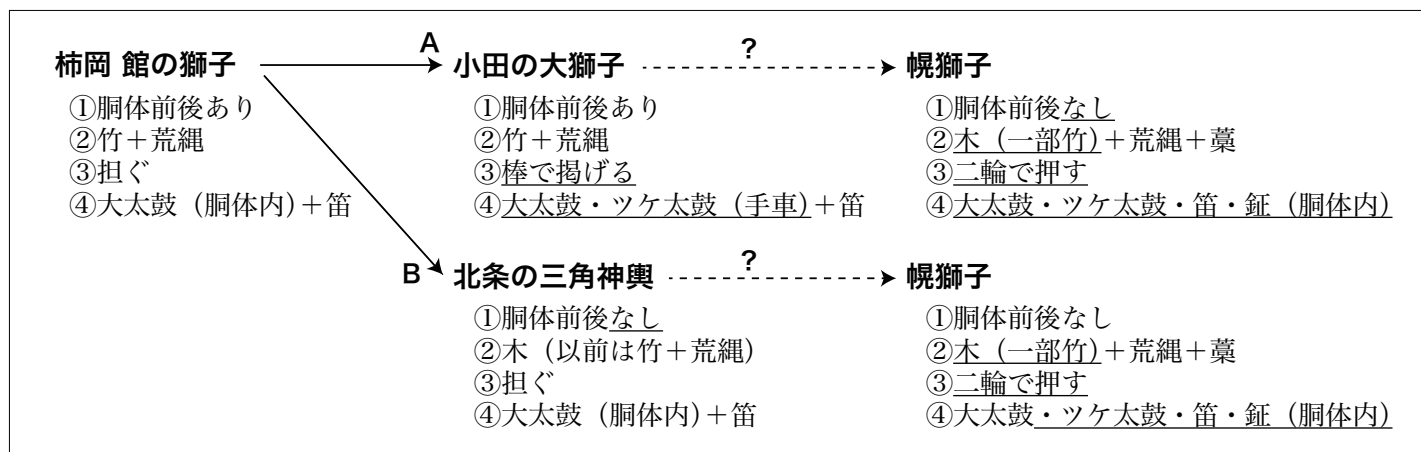
▲獅子小屋の天井部（上空から）

上：土橋町 下：仲之内 フジヤマ作成の3D画像より
棟木や桁に藁が巻かれている。天井は桁から棟木に板材を竹を渡す（差し込む）ことで作られている。



▲小田の大獅子の手車

2025年7月19日、谷仲撮影



そのどちらかのような形態を祖型に幌獅子は生まれたと考えられます。

ここで、再び伝承に戻ってみましょう。土橋町や仲之内に伝わる伝承は、以前は「竹材で組んだ「小屋（やぐら）」状で「担ぐ」方式」だったというものでした。これが江戸時代の「大獅子」の姿だったのでしょ。とすると、近いのは北条の三角神輿のような形態。あるいは現在は行われていませんが、上曾の獅子のような形態が想起されます。そう考えると、館の獅子のような形態が祖型で、その胴体が立体的、小屋（やぐら）状に変化し（＝「土橋の大獅子」）、さらにそれを荷馬車を基礎に小屋掛けにしたものが幌獅子だと考えることができそうです。

ただ、小田の大獅子のような形態から幌獅子が生まれた可能性も残ります。例えば、幌獅子では小屋の前方をあげるのが巡行時の正しい姿だと言われます。小田の大獅子のような棒で掲げていた時代があったゆえの伝承とも考えられます。また、囃子方（楽器構成）を重視すると、ツケ太鼓も存在する小田の大獅子の方が近いことになります。

今のところは、「土橋の大獅子」は、館の獅子のような形態から変化した小田の大獅子、北条の三角神輿のような形態のどちらかであったかは確定することができません。ただ、いずれかのような形態であり、それを荷馬車を基礎に小屋掛けにしたものが幌獅子だと考えることができそうです。

では、なぜ車輪付きの小屋掛けにしたのでしょうか。また、それはいつ頃のことだったのでしょうか。明治 41 年の祭礼の様子を写した写真絵葉書には、土橋町と仲之内の獅子が写っていますが、現在の幌獅子と同じ形態をしています。つまり、この頃までには幌獅子が成立していたと言えます。

江戸時代から明治 41 年までの間での大きな変化としては、祇園祭・愛宕祭の出し物であったのが、總社宮の祭礼の出し物に組み込まれていったことがあります。そして明治 35 年に現在まで続く年番制度が確立し、各町内への神輿渡御が定式化されます。

土橋町・仲之内は、神輿渡御が定式化する以前の明治 33 年の記録に「外二土橋町仲之内町工送ル酒代」とあり、その頃からすでに露祓を依頼させていたと推測されます。供奉行列の渡御に随いながら囃子と獅子舞を演じることができるようという機動性の確保のために生み出されたのが「幌獅子」だったのではないのでしょうか。つまり、都市祭礼のなかにおける大獅子の進化形態が幌獅子であると考えられるのです。そしてその進化が求められたのは、石岡という広大な都市空間ゆえだったのでしょうか。



▲明治 41 年の土橋町と仲之内の幌獅子
土橋獅子舞保存会 1989『常陸総社宮例大祭と獅子』

芸態から探る① 昇殿の舞

現在の幌獅子の芸態は、基本的に幌獅子の巡行の際に「歩行舞」を舞うのみですが、土橋町ではそれに加えて「昇殿の舞」が演じられます。また、土橋町ではかつて「春雨」という演目も存在しました。幌獅子の芸態の起源は、過去の文献で「稲吉の大神楽」（かすみがうら市下稲吉）の系統をひくものであることが指摘されています。また『常陸國總社宮祭礼の獅子・山車・ささら行事調査報告書』では、露祓町である仲之内が千代田の稲吉に大神楽を習いに行き、大正時代頃までは「昇殿」を演奏していたことが示されています。

「昇殿の舞」は、右手に御幣、左手に鈴を持って舞うという、大神楽の獅子舞が持つ要素が含まれます。かすみがうら市下稲吉には、かつて桐乃家福助らによって演じられた「稲吉神楽」が存在しました。東日本の大神楽圏が関東系と奥州系とで別れる中、稲吉神楽は関東系であり、獅子舞に用いられた囃子は「関東側（かんとうが）」と呼ばれました。その中に「昇殿」という手に御幣・大鈴を持って舞う演目があり、これが昇殿の舞の原型になったことが考えられます。

「春雨」は現在行われていませんが、囃子には三味線を伴っていたと言います。大神楽では獅子に舞踊（紀伊の国、端唄、小唄）が入る演出があったとされ、土橋町の「春雨」がこうした演出に影響を受けて成立したと考えられます。

では、「昇殿の舞」や「春雨」が成立した年代はいつだったのでしょうか。今泉義文氏は昭和 34 年発行の『常陸総社宮大祭について』で、「御大典奉祝神田祭に出仕して、江戸っ子を陶醉せしめたことは余りにも有名」、「次いて水戸権現三百祭に乞はれて出場」「“昇殿”や“春雨”の舞を演ずる妙技は、各所で観衆を驚嘆せしめた」と記しています。前者は大正 4 年、後者は大正 10 年ですので、遅くとも大正 10 年には「昇殿の舞」と「春雨」が成立していたことになります。

稲吉神楽の活動期間は諸説あり、江戸時代から存在していたとするものと、桐乃家福助一代限りの神楽集団であったとするものがあります。「昇殿の舞」の成立年代は、上記の活動期間と大正 10 年には既に「昇殿の舞」が成立していたことを踏まえ、2 つ考えられます。まず、稲吉神楽が江戸時代から存在したものとし、明治 33 年頃の土橋・仲之内両町の露祓開始及び總社宮の縣社昇格によって、格式を重んじ、他との差別化を図る目的で明治 33 年以降から大正 10 年頃にかけて成立したとする説、もうひとつは稲吉神楽が福松一代限りであったものとし、福松が大神楽師として大成していたであろう大正 3 年頃（福松約 25 歳）から大正 10 年頃に成立したとする説です。

明治 33 年頃から土橋町・仲之内が神輿の露祓を務めたことを考えれば、その頃すでに練り歩くことを想定した舞や囃子、すなわち「歩行舞」は考案されていたと考えられます。露祓として格式を重んじ、他との差別化を図る目的で、大神楽を参考に考案されたのが「昇殿の舞」と「春雨」だったのでしょう。つまり、「歩行舞」の囃子と「昇殿の舞」の起源を別に求めることができます。「歩行舞」はストーリー性のある複雑なものではなく、基本的に獅子頭を左右に振る動作なので、経過の中で創意工夫が重ねられ現在の形になったと推測されます。



▲昇殿の舞（土橋町）

神霊移し後の大神輿前での奉納 2024 年 9 月 14 日、伊藤撮影

芸態から探る② 歩行舞

次に、「歩行舞」の囃子の起源は、どこに求められるでしょうか。

「歩行舞」の囃子の起源は、近世府中の祇園祭に登場した青木町の「ちえんちえくちえん」（泡齋念仏の人形踊り）や、葛西金町村を発祥とする「馬鹿囃子」など、近世の祭囃子の様々な要素を吸収しながら成立したことが考えられます。

青木町の「ちえんちえくちえん」は五体一組の泡齋念仏の鐘打ちの人形踊りで、「ちんちこちん」とも称されました。この「ちえんちえくちえん（ちんちこちん）」の語と歩行舞の囃子の擬音である「じゃらもこじゃん」は類似しています。『石岡市

史下巻』では、「山口仙栄が考証した青木町の「ちえんちえくちえん」は、五体の人形が消滅して獅子舞にかわっても、鉦を主としたお囃子の擬音から「ちんちこちん」の名前が伝えられていたことが考えられるのである」とあります。また、昭和8年9月の『いはらき』新聞報道では、「青木町の「ちんちこちん」（赤獅子）」とあります。このように青木町の「ちえんちえくちえん」は五体一組の泡齋念仏の鐘打ちの人形踊りから「獅子舞」を伴う風流に変化しています。この変化は獅子風流の流行に伴った変化の可能性があります。青木町ではもともと存在した人形踊りの囃子に合わせて赤獅子を舞い、その囃子を既存の獅子風流が取り入れ、のちに「歩行舞」の囃子に発展させた可能性が考えられます。

葛西金町村を発祥とする「馬鹿囃子」は、紀州和歌の浦の住人であった葛西金町村の香取大明神（現葛飾区葛西神社）の神主、能勢環が考案したとされています。千葉県香取市で伝承される「佐原囃子」の曲目の一つに「馬鹿囃子」がありますが、そのルーツは葛西金町村を発祥とする「馬鹿囃子」とであるとされています。佐原囃子は大鼓・小鼓が入ることでは知られていますが、「馬鹿囃子」を演奏する際の楽器構成は、大太鼓1、小太鼓2（二丁附の場合）、笛1、鉦1であり、小太鼓と鉦が絶え間なく「テン スケテン テン」のリズムを続け、それに大太鼓を加え、笛がメロディーを演奏します。こうした楽器構成（五人囃子）である点は、江戸の祭囃子や石岡の歩行舞と共通しており、小太鼓が「テン スケテン テン」のリズムを繰返し演奏する点も歩行舞と類似します。歩行舞の囃子の起源を馬鹿囃子とした場合、どのように石岡へ伝わったかは定かではありませんが、江戸から佐原を経由して伝わった可能性も考えられます。水運が盛んだったころ、霞ヶ浦を介した石岡・土浦と佐原の交流は商業面において盛んに行われていましたが、文化面においても様々な交流があったと考えられます。

関東周辺の祭囃子の起源を葛西囃子・神田囃子などの江戸の祭囃子とするものは多く、さらにそれらは葛西金町村を発祥とする「馬鹿囃子」が起源であるとされています。しかし、現在の「屋台・昇殿・鎌倉・仕丁目・屋台」の五曲・切り囃子五段囃子になったのは、明治以降とされています。能勢環が馬鹿囃子を考案して以降、多くの変遷を経て現在の形となりましたが、その過程には大神楽師の介入がありました。土橋町の「昇殿の舞」や「春雨」の成立にも大神楽師の介入が見られ、祭囃子発展の中に大神楽師の存在が大きく影響を与えた可能性が考えられます。



▲歩行舞〔土橋町〕

獅子頭を大きくふることで躍動感がでる
2023年9月18日、萩谷撮影



おわりに

今回の展示では、「幌獅子」の特徴や分布を確認したうえで、その成立過程について「形態」と「芸態」に着目して探ってきました。

まず「形態」上の祖型を柿岡館の獅子、小田の大獅子、北条の三角神輿、上曽の獅子のような竹材を荒縄で組んだ胴体を担いだり曳き回したりする獅子に求めました。そして現在土橋町や仲之内に伝わる伝承から、江戸時代の「大獅子」とは、北条の三角神輿や上曽の獅子のような姿だったのではないかと考えました。さらに現在のような車輪付きの小屋掛けの幌獅子へと進化した理由を、神輿渡御の供奉行列に随いながら囃子と獅子舞を演じることができるようにという機能性確保に求めました。

次に「芸態」のうち「昇殿の舞」については、土橋町と仲之内が神輿の露祓を務めるようになった際に、他との差別化を図る目的で「稻吉の大神楽」を参考に考案されたと考えました。「歩行舞」については、江戸時代の青木町の「ちえんちえくちえん」（泡齋念仏の人形踊り）や「馬鹿囃子」など、江戸時代の祭囃子の様々な要素を吸収しながら成立したものと考えました。

つまり「幌獅子」は、石岡という広大な都市空間を渡御する神輿の供奉行列、露祓のために成立したと考えられるのです。

「常陸國總社宮例大祭（石岡のおまつり）」の中核をなす「常陸國總社宮祭礼の獅子・山車・ささら行事」は、令和3年に石岡市指定無形民俗文化財に指定されました。石岡市では令和5～7年度に学術調査を行い、今回の展示はその調査成果によるものです。調査にご協力いただきました参加者のみなさま、地域のみなさま、関係者のみなさまに感謝申し上げます。

石岡市立ふるさと歴史館第46回企画展

幌獅子 成立過程を探る

令和8年10月7日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195 石岡市柿岡5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016 石岡市総社1-2-10

TEL 0299-23-2398